

ラオス人民民主共和国
セタティラート病院改善プロジェクト
運営指導調査団報告書

平成 13 年 4 月

国際協力事業団
医療協力部

序 文

ラオス人民民主共和国セタティラート病院改善プロジェクトは、1999年10月から5年間の協力期間において、無償資金協力によって建設された新セタティラート病院の各診療科の充実を図り、医療水準と卒後研修機能等のレベルアップを実現し、ひいてはラオス人民民主共和国全体の医療水準の底上げを図ることを目的として協力が開始されました。

このたび、協力開始後1年半あまりの時点でこれまでの活動内容を確認し、本プロジェクトにかかわる専門家とカウンターパートに必要な助言を提供し、また本プロジェクト当初の目標を達成するために必要な事項をラオス人民民主共和国側関係者と協議するため、琉球大学医学部ウイルス学教室教授である福永利彦氏を団長として、2001年3月26日から同年4月1日まで、運営指導調査団を派遣しました。

本報告書は、上記調査団の調査結果を取りまとめたものです。ここに、本調査にご協力を賜りました関係各位に謝意を表しますとともに、今後のさらなるご支援をお願い申し上げます。

平成13年4月

国際協力事業団

医療協力部長 遠藤 明

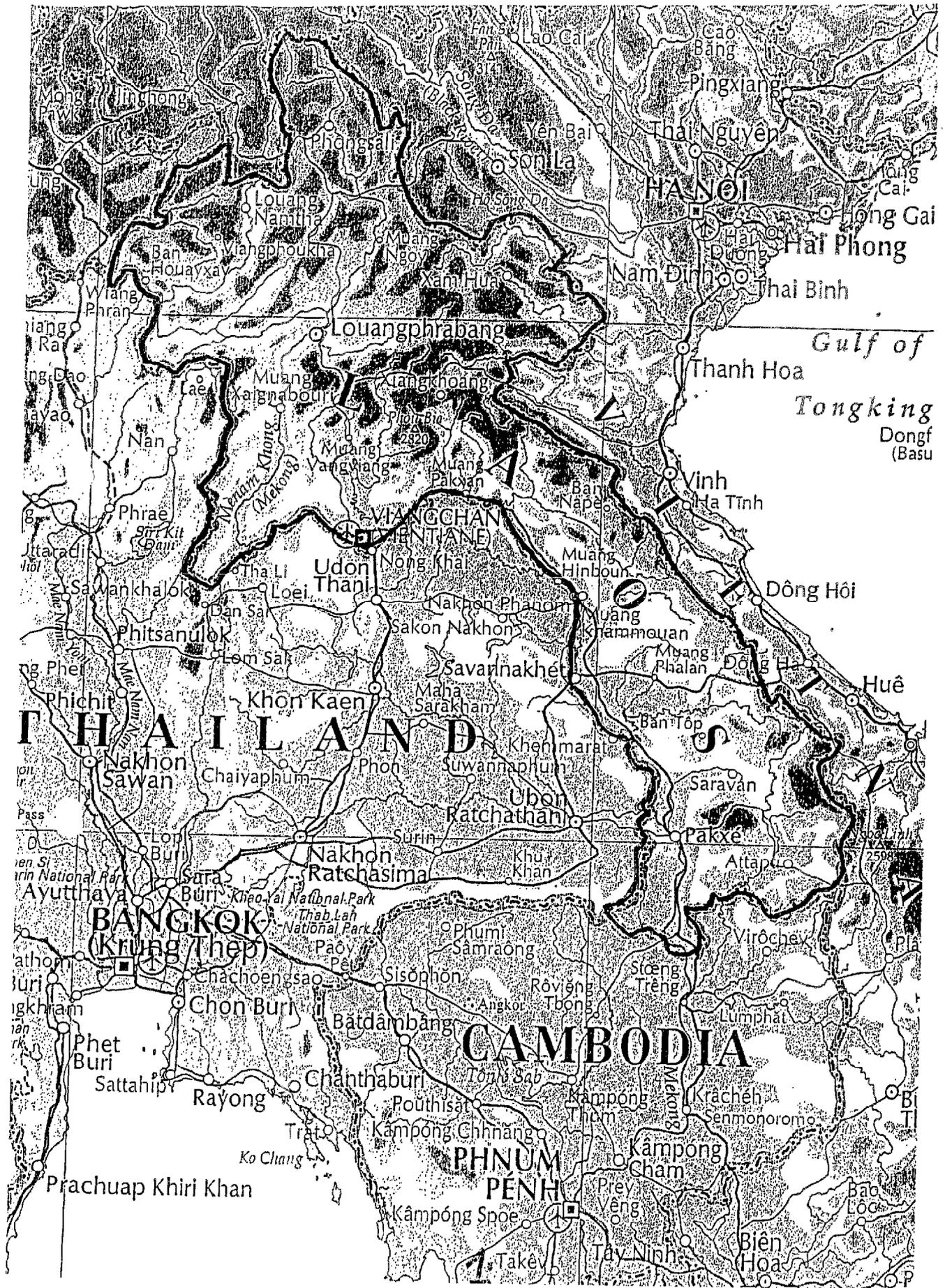


ミニッツ署名式



調査団とJOCV隊員との懇談会

地図：ラオス人民民主共和国



目 次

序 文

写 真

地 図

1. 運営指導調査団派遣	1
1 - 1 調査団派遣の経緯と目的	1
1 - 2 調査団の構成	2
1 - 3 調査日程	2
1 - 4 主要面談者	3
2. 総 括	5
2 - 1 調査団の検討事項について	5
2 - 2 調査事項と提言など	7
3. プロジェクト運営上の諸問題	9
3 - 1 プロジェクトの進捗状況	9
3 - 2 問題と対策	9
3 - 3 供与機材の利用状況	9
4. 指導内容	10
4 - 1 日本側のとるべき対応	10
4 - 2 相手国側のとるべき対応	10
4 - 3 その他セタティラート病院プロジェクト全般にかかわる問題	10
附属資料	
ミニッツ	13

1. 運営指導調査団派遣

1 - 1 調査団派遣の経緯と目的

セタティラート病院は病床数 200 床、医師数 75 名の総合病院で、ラオス人民民主共和国(以下、ラオス)北部地域における中核的医療機関である。また、医科大学生の臨床教育、医師の卒後教育を担う医育機関でもある。ラオスは第 4 次 5 カ年計画に則った「西暦 2020 年への保健衛生システム構築戦略」などの国家計画に基づき、同病院の中核的医療機関、医育機関としての機能を高めることにしており、無償資金協力による新病院建設も 1999 年に着工され、2000 年 11 月に完工した。同国では、感染症などの急性疾患等の頻度がとりわけ高く、またこれらを救命できないために高い死亡率を招く結果となっている。セタティラート病院においても、患者の大半は急性疾患等であり、先進国の技術があれば失われずに済んだ命が数多く失われているのが実状である。そのため、救命可能疾患に関する治療技術の移転が望まれるとともに、数多い患者を効率的に診療する病院運営管理能力の向上が必要である。ラオス政府はこのような状況を改善するため、当病院の各診療科の充実を図り、医療水準と卒後研修機能等のレベルアップを実現し、もってラオス全体の医療水準の底上げを図るべく、わが国に対し技術協力を要請してきた。

新セタティラート病院が無償資金協力により完成し、2001 年 2 月には開院した。プロジェクト開始から 1 年半を経過し協力活動も軌道に乗りつつあるこの時期に、これまでの進捗状況のレビュー、課題、問題分析、調査結果をもとに、今後の活動計画とめざすべき目標の策定および日本・ラオス双方での再確認を行う目的で本調査団が派遣された。

本調査団の活動目的は具体的には以下のとおりである。

- (1) ラオス側カウンターパートおよび専門家チーム等のプロジェクト関係者との意見交換、ならびに活動現場である新病院の視察により、プロジェクトの進捗状況の確認と課題、問題点の把握を行う。
- (2) ラオス側関係機関との協議を通じて、現在までの活動状況を合同でレビューするとともに、目標と活動内容の整合性を検討する。
- (3) これらの協議結果をもとに、当初計画の見直しと調整を行い、今後の活動計画を策定する。
- (4) 一連の調査、協議を通じて日本とラオス双方で合意した事項についてはミニッツに取りまとめる。

1 - 2 調査団の構成

	担 当	氏 名	所 属
団長	総 括	福永 利彦	琉球大学医学部ウイルス学教室教授および国内委員長
団員	医療一般	岩政 輝男	琉球大学医学部部長
団員	協力計画	斉藤 理子	国際協力事業団医療協力部医療協力第一課職員

1 - 3 調査日程

2001年3月26日(月)～同年4月1日(日)

日順	月日	曜日	移動および業務
1	3 / 26	月	移動:(日本) バンコク
2	3 / 27	火	移動:08:20 バンコク 09:30 ヴィエンチャン(TG690) 11:00 JICA 事務所訪問 11:40 日本大使館表敬 ----- 13:30 ヴィエンチャン市保健局表敬 14:15 保健省表敬 15:00 ヴィエンチャン市表敬 15:40 外務省表敬 16:30 プロジェクトとの内部協議 18:30 JICA 事務所との打合せ
3	3 / 28	水	08:30 セタティラート病院表敬/視察 10:30 他病院視察(市内郡病院、ヘルスポスト) ----- 13:30 セタティラート病院との協議
4	3 / 29	木	09:00 合同調整委員会 ----- PM 署名式準備
5	3 / 30	金	08:45 ヴィエンチャン市保健局挨拶 09:30 保健省挨拶 11:30 ミニッツ署名式 12:00 団長主催昼食会 ----- 16:00 日本大使館報告 16:45 JICA 事務所報告
6	3 / 31	土	移動:10:30 ヴィエンチャン 11:35 バンコク(TG691)
7	4 / 1	日	移動:バンコク (日本)

1 - 4 主要面談者

(1) ラオス側関係者

1) 保健省(Ministry of Health : MOH)

Dr. Ponmek Dalaloy	Minister
Ms. Chanthanom Manodham	Director of Cabinet
Dr. Khemphet Vanthanouvong	General Director of Health Care Sector Cooperation with Japan

2) Health Department, Vientiane Municipality

Dr. Chanphomma Vongsamphanh	Director
-----------------------------	----------

3) Sethathirath Hospital

Dr. Bouaphan Phanthavady	Director
Dr. Vanphenh Pholsena	Deputy Director
Dr. Khampe Phongsavath	Deputy Director
Dr. Thongdy Luangxay	Chief of Medical Technology Section
Dr. Sengthong Birakoun	Chief, Personnel Dept.
Mr. Somsanouk Vongxay	Chief, Financial Dept.
Dr. Panyavong Chitapanya	Chief, Internal Medicine
Dr. Oukeo Khounthalyvong	Deputy Chief, Internal Medicine
Dr. Sinthavong Phyatep	Deputy Chief, Internal Medicine
Dr. Keokedthong Phongsavan	Doctor, Obstetrics and Gynecology
Dr. Amphoy Sihavong	Doctor, Obstetrics and Gynecology
Dr. Pramkanchana Xaykosy	Doctor, Pediatric Section
Dr. Vantoula Khaykhamphithoune	Doctor, Pediatric Section
Dr. Phoudeth Visounalat	Doctor, Pediatric Section
Dr. Vackhaly Boudtavong	Chief, Radiology Section
Dr. Saykham Phasayaseng	Deputy Chief, Laboratory Section
Dr. Sengthong Khambouta	Chief, Pharmacy Section
Mr. Vorachith Thiphakoon	Deputy Chief, Pharmacy Section
Ms. Boun Phitasounthont	Head Nurse, Nursing Section
Ms. Kamla Sioudom	Deputy Chief, Nursing Section
Ms. Pindavone Phaxayavong	Deputy Chief, Nursing Section
Mr. Phonesavanh Thammavongsa	Deputy Chief, Nursing Section
Ms. Somchai Shihalath	Nursing Section

Dr. Sivilay Sayadeth

Secretary's Office

Ms. Sililack Banouvong

Secretary's Office

(2) 日本側関係者

1) 在ラオス日本大使館

宮本 吉範 特命全権大使

平山 周作 二等書記官

2) JICA ラオス事務所

青木 眞 所長

池田 則宏 所員

小川 美織 企画調査員

天野 博之 長期専門家(保健省アドバイザー)

2. 総括

セタティラート病院をラオスで最も近代的な病院に改善し、「患者第一」の医療に徹底させるとともに、医学教育機関としても卒前教育と卒後教育の両者において貢献し、ひいては、ラオス全体の医療水準の向上に資することが、本プロジェクトの目的とされる。

2001年2月16日に新築セタティラート病院のラオス側への引き渡し式が執り行われ、プロジェクトは本格的な協力活動期に入った。本調査団の派遣は時期的に適切であった。

2 - 1 調査団の検討事項について

(1) 2000年度活動報告(サマリー)

ラオス側、日本側双方に問題はなかった。

(2) 2001年度活動予定(サマリー)

ラオス側、日本側双方に問題はなかった。

(3) 特記事項

1) メンテナンス要員の確保について

2001年5月にメンテナンス要員(技術者)への技術指導のため、2名の専門家を派遣することが決定している。そのカウンターパートとして、最低4名の技術者を用意することを日本側から強く要望した。ラオス側は、技術者の確保のためラジオ、テレビ、新聞などで広く応募者を募っているが、現時点で1名しか得られていないこと、今後も見通しは明るくないことを表明し、日本側と激しい議論がなされた。この状況は、一義的にはラオスにおける技術者養成の制度の弱さがあり、技術者の層が薄いこと、二義的には公務員の給料の極端な低さがあり、数少ない優秀な技術者は待遇のよい民間企業へ流れることによると思われる。最終的に、ミニッツでは、最低(at least)4名の技術者をラオス側はrecruitするという文言で合意された。

2) 病院管理分野の要員配置について

病院の管理に関しては、現在、主として医師と看護婦がその任にあっている。この分野のプロフェッショナルな要員の確保が、近代化された病院の管理には必須の条件であることを調査団側は強調した。ラオス側は、これに理解を示したが、現時点で法律・経済系の大学卒要員をセタティラート病院に配置できる状況はないようで、実現するには数年を要する印象であった。2001年度のこの分野における日本での研修も、セタティラート病院の医師(Dr. Thongdy LUANGXAY)が当てられている。

3) コストシェアリングの要求について

日本側のこの要求に対して、ラオス側委員の1人から「この要請は、日本側がプロジェク

ト予算を減らす目的で出されたのか」という質問があった。これに対して大槻調整員の「日本側のプロジェクト予算は年間ほぼ一定であり、ラオス側の一部負担による余剰の予算は、本プロジェクトの他の分野で必要とされる予算として使用される」旨の説明により、ラオス側はこの要請を了承した(ミニッツで合意)。

4) 新セタティラート病院の医療領域における専門性(Specialties)について

この案件については、ラオス保健省内で政策として十分審議された案であるかを確認することが重要と考えていた。ラオスには、マホソット病院、友好病院(旧ソ連の援助による)およびセタティラート病院の三大病院がある。それぞれ general hospital としての役割をもつが、専門性の位置づけも将来に向けて重要課題である。保健省内での審議・検討の状況について質問したところ、セタティラート病院長代行(Dr. SomOck KINGSADA)は、「三大病院の責任者を含めた保健省内の審議は十分尽くされており、将来計画としての案が合意されている」と答えた。この内容は、以下のとおりである。

Specialties of three big hospitals in Lao P.D.R.

Mahosot Hospital

Cardiology(CCU)

Gastrointestinal diseases

Infectious diseases

E. N. T.(Ear, Nose, Throat)

Surgery(Kidney, Pediatrics surgery)

Friendship Hospital

Orthopedics(Trauma)

Neurosurgery

Hemodialysis

Sethathirath Hospital

Mother and Child Health(MCH)

Cancer

Blood diseases

Digestive diseases

Heart diseases

Endocrine disorders

セタティラート病院の Specialties について、調査団は中・長期的な目標と理解する。これらの目標をすべて高水準で達成することは、ラオスの現状、その他を考えるとほとんど不可能と思われる。しかし、ラオス保健省とセタティラート病院が将来に向けて積極的な専

門性・特色に関する構想を提案してきたことに対して、高く評価したい。本目標達成のため、本プロジェクトの国内委員会である琉球大学医学部としては、セタティラート病院の上記の専門性の形成・確立に可能な限りの協力をする。

2 - 2 調査事項と提言など

(1) セタティラート病院の近代化に関するラオス側の強い要望について

保健省官房長(Ms. Chanthanom MANODHAM)、ヴィエンチャン特別区市長(Mr. Bounheuang DOUANGPHACHANH、名刺によると Member of LPR Party Committee, Secretary Committee であり、党内ではポンメック保健大臣よりはるかに上位)、その他の要人との会談で強い要望として出されたのが、「セタティラート病院の近代化のためにはCTスキャナーの設置が必須であるので、ぜひとも供与をお願いしたい」ということであった。特に、ヴィエンチャン市長からの要望が強かった。その理由として、ヴィエンチャン市民が新セタティラート病院に近代的医療機材の充実を期待するところが大きいこと、現在、ヴィエンチャン市民の多くが、メコン川対岸のタイ国ノンカイ市の病院へ、CTスキャナーなどの近代的施設があるという理由で受診しており、その経費が大きく、市民の負担になっている。新セタティラート病院にCTスキャナーの設置を望む市民の気持ちをわかってほしい、ヴィエンチャン市民のみならず、ラオス国民全体が新セタティラート病院を「日本の病院」と受け取っており(友好病院がかつて「ソ連の病院」と受け取られたように)、それだけにいっそう期待感が大きい、という3点があげられた。

調査団は、ヴィエンチャン市長に対しては、市民の医療に対する満足度を高めるには単に設備の拡充のみによるのではなく、「患者第一」の医療をめざすことの重要性を述べ、保健省官房長に対しては、近代的病院としての役割を果たすには、その基盤として管理・運営の近代化が必須条件であり、機材の拡充のみではないことを伝え、CTスキャナーの供与について前向きな表現は差し控えた。

さらに、CTスキャナーについて、保健省がマホソット病院への設置を決定したとの情報を天野専門家と Dr. SomOck に確認したところ、間違いのないとのこと、しかし、いつまでに設置されるかは不明で、フランスからの購入を考えている、という Dr. SomOck の答えであった。

この件について、調査団は、CTスキャナー供与の積極的方向で以下のように考える。

まず、CTスキャナーの診断における有用性は広く一般に知られるほどになっており、ラオスで最も近代的な病院をセタティラート病院がめざすという目標から、これの供与は特別枠の予算を必要としても、実施が望ましい。

プロジェクト方式技術協力の理念からいえば、セタティラート病院はラオスに属する病院であり、その発展の基盤さえ整えればプロジェクトの役割を果たすことができ、

あとは、ラオス側の自助努力に俟つべきともいえよう。しかし、社会的、ならびに現実的には、新セタティラート病院は「日本の病院」として、現在、ラオス国内で認知されている事実があり、特にCTスキャナーは近代化の象徴的な意味をもち、国策的観点からも、供与するのが得策と考える。その場合、マホソット病院に設置される以前に供与されることが望ましい(新セタティラート病院内に1室が、CTスキャナー設置用として用意されていた)。

(2) 日本人医師のより積極的な医療活動に対する要望について

保健省官房長から「日本人医師は、遠慮せずにどんどん手術なども、セタティラート病院で実施してほしい」と要望された。保健省からすでにラオスのライセンスに関係なく手術などの医療行為を許可する公文書がプロジェクト側に発行されている。技術指導活動が本格化する今年度から、ラオス側の期待に応じて日本人医師による医療技術移転を精力的に進めなければならない。新セタティラート病院を受診する患者の多くが、「日本人ドクターに診てほしい」と言うそうである。これについては、国内委員会で広く議論することが重要と考える。

(3) セタティラート病院職員の待遇改善について

セタティラート病院の医師の給与は、約25～30米ドルである。この額は、基本的な生活を維持するだけでも大幅に不足し、最低80～100米ドルが必要とされる(野崎チームリーダー)。病院の独立採算制については、ラオスでカンボディア国の例がよく知られており、セタティラート病院で収益が上がればその一部を職員の待遇改善に充てるという方向性は、保健省内でも認められているようである(天野専門家)。また、調査団が訪問したヴィエンチャン市内の郡病院(Hatxayfong District Hospital)では、収益の一部を職員の待遇改善に充てることをすでに実施しているとの情報があった(黒岩チームリーダー)。

(4) 医療廃棄物の処理について

ラオスにおいて、医療廃棄物の処理施設を有する病院は、新セタティラート病院のみである。ヴィエンチャン市内の他の病院(マホソット病院と友好病院を含む)から出る医療廃棄物についても、セタティラート病院の施設で有料により処理してもらいたいという動きが出ているという(黒岩チームリーダー)。これは、ラオス側の問題であるが、新セタティラート病院が唯一の近代化された病院であるという観点から、プロジェクトとしても、この計画に沿うことが望ましいと思われる。新セタティラート病院が医療廃棄物処理のラオス国内のモデルにもなっていることがわかったので付記しておく。

3. プロジェクト運営上の諸問題

3 - 1 プロジェクトの進捗状況

大略進捗状況はよいと考えられる。しかし、日本側の努力によるところが大きく、ラオス側の対応の向上に今後期待しなくてはならない。

3 - 2 問題と対策

各論的な問題以外に総論的な視点からは、日本側の専門家による技術指導を受けたラオス側スタッフの個人的なレベルアップに止まり、周囲への指導に至らないといった指摘がある。この点に関しては、技術指導を行った期間が短く、指導を受けたラオス側スタッフが自信をもって周囲に教えるべきレベルに至っていない、社会主義国という横並び体制からは、政府により任命された指導者としての位置づけ等が必要と考えられる。

各論的な問題としては、病院管理運営体制(機械等のメンテナンス要員の確保等も含む)、医療のレベルと専門性、看護体制、薬局、特に薬品管理、職員の待遇等にいずれも改善しなくてはならない点が多くみられる。これらのうちの最重要課題は、看護の専門性と勤務体制の確立、および医療のレベルの向上である。看護婦の研修制度を十分(頻度と期間)用意する必要がある。医療レベルの向上については、日本への留学制度等も含めて考慮する必要がある。さらに管理運営体制の改善も重要であるが、日本側専門家が長期派遣され指導にあたっているため、それに期待する。

3 - 3 供与機材の利用状況

細かい点は短期間の調査では明らかではないが、大略目的を達しつつあると考える。

4. 指導内容

4 - 1 日本側のとるべき対応

(1) 全体的には技術指導の徹底

指導を行う、または日本へ派遣する期間を長くする。さらに頻度を多くする。

(2) 医療の質の向上

CTスキャナーなど現代の医療に即したレベルの機材の供与、病理標本の作製などが必要である。

(3) 医師レベルアップ

日本で博士の学位を取得するなど、レベル向上につながると考えられる指導も必要である。

4 - 2 相手国側のとるべき対応

技術指導を受けた者から周囲への指導効果の波及、たとえば技術指導を受けた者に何らかの資格を付与するなども考えられる。病院内での位置づけも必要と考えられる。

4 - 3 その他セタティラート病院プロジェクト全般にかかわる問題

(1) 放射性同位元素(RI)によるガンの治療等の要求がラオス側から出ていたが、ラオスには医療廃棄物、産業廃棄物はもとより、放射性同位元素等の取り扱い規則や廃棄に関する法的な整備がなされていない。これらの点についての指導が必要である。

(2) 医師の資格、専門性についての法整備

(3) 看護婦や栄養士の資格等についての法整備

(4) ラオスにおける公衆衛生統計や食品衛生指導、食品の栄養分析の必要性など周辺環境の整備が必要であろう。